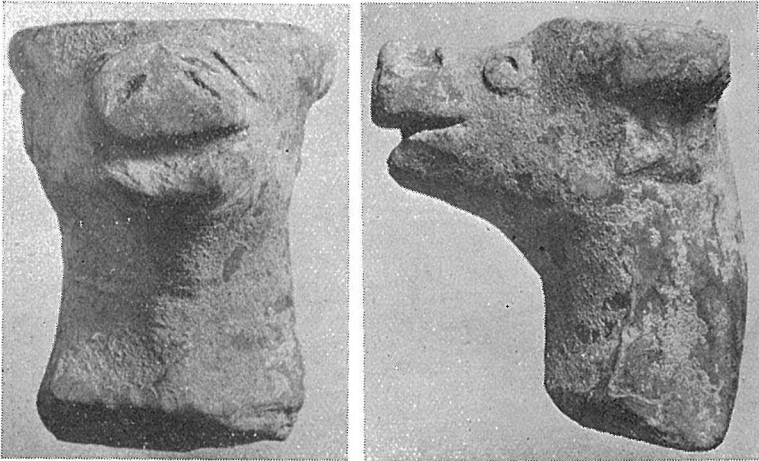
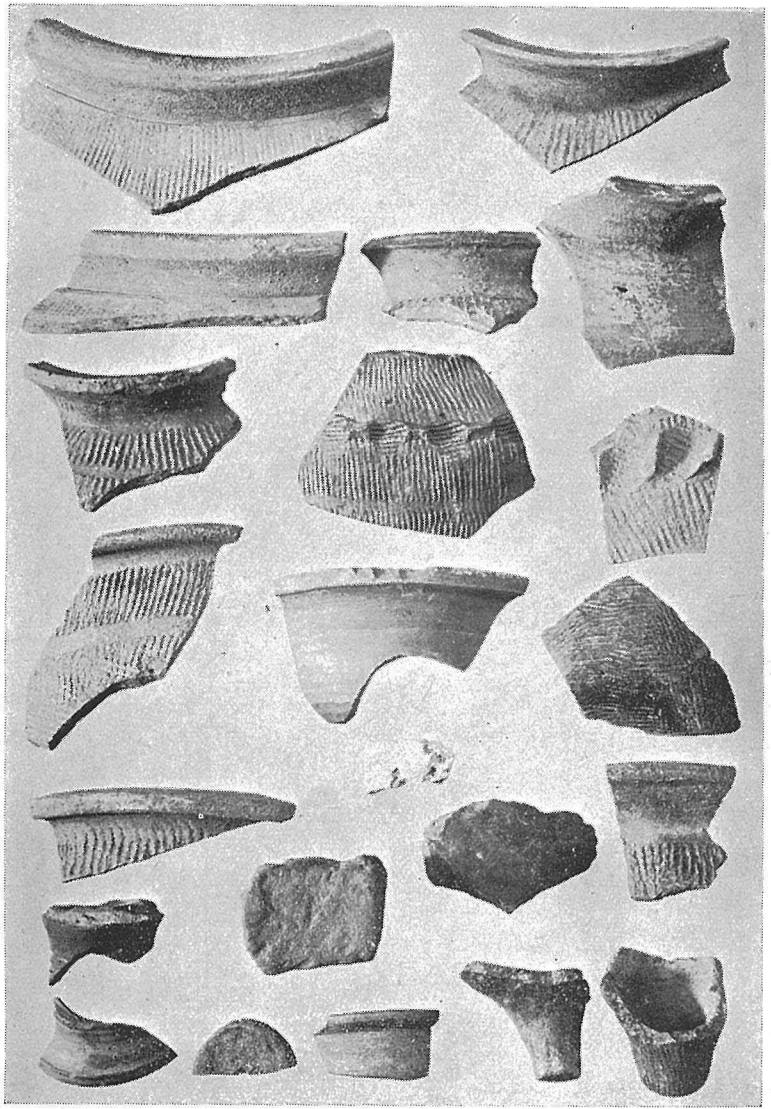




第一圖 殷墟侯家莊殷王墓遺址



第二圖 侯家莊灰陶犧首



第三圖 侯家莊土器片·石器片·鑄型斷片

# 殷墟侯家莊記

水野清一

1

昭和十四年十月二十七日、小野勝年君といつしよに、京漢線を南下して安陽についた。こんどの安陽ゆきの目的は魏の曹操が都したといふ鄴都、つまりいまの臨漳縣鄴鎮をおとづれることにあつた。しかし、きてみると、彰徳の道公署顧問多々良氏の厚意によつて、はからずも殷墟を見學する機會にめぐまれた。

安陽河畔の殷墟は殷代の故址として早くから知られてゐる。最初に文字のある龜版獸骨を出土して有名な南岸の小屯附近は、以前にいつてみたことがあるので、ちかごろ殷王墓で名高い侯家莊の發掘地點をさぐることにして、もし時間の餘裕があれば、さらに彩文土器の遺跡として知られてゐる後崗をたづねたいといふ手はずをさだ

めた。

◇

とにかく、二十七日と二十八日の夜はむさくるしい、またうすらさむい安陽の宿にあかし、あくれば、いよいよ二十九日の朝、侯家莊にむけて出發した。朝といつてもいろいろの不準備から、いよいよ出發したのは十二時ちかくであつた。多々良顧問の自動車一臺、警察の林仁三郎氏をはじめとする乗馬の警官たちにまもられ、うすらさむい、くもり日の風をきつて北門外にでた。

黄土の坂路を急にさがると、河がある。安陽河である。すなはち、むかしの洹水である。水量は豊富で、流れもわりにはやい。どこからのぼつてきたのか、二三の帆船が石橋のわきにとまつてゐる。何の彫刻もない大きな石材をならべただけの橋。水はこの橋桁をあらふばかりに

流れてゐる。橋の上は車、人、ひきゝりなしに往來がある。さびれたりといへども、もとの彰徳府城、河南省北部隨一の都會であるから、その北門外が、このくらゐにぎやかなのは當然であらう。橋をわたるとまた坂になつてゐて、これをのぼると、あとは垣々たる平野である。

鐵道の西側にもとの紡績廠がある。あまり遠出をしなさんな、とわが警備兵の親切な注意をきゝながら、西北にすゝむ。道は耕地の間を出たり、入つたりしてつゞいてゐる。自動車などはもはや用をなさない。折からとほりかゝつた二臺の洋車をひろつて道をすゝむ。司空村あたりではもうさかんに土器が散布してゐる。殷代の土器である。

みんな繩席文が入つて鼠色をしてゐる。散つてゐるのみならず、地下二三尺のところ、包含層さへみえる。あまり攪亂されてゐないとみえて、破片もかなり大きい。これから武官村をへて、はるかに目的地たる侯家莊の部落をのぞむ。たゞ垣々たる耕地である。ところどころに部落をつゝむ樹林がみえるのみである。安陽河も、はる

か南方から西方にまがつてゐるのだらうと、地圖の上で推定されるだけである。

## 2

そもそも、殷墟の發掘は、昭和三年から支那事變のおこつた十二年に至るまで、かれこれ十年にちかいかい歲月を経過し、中央研究院の發掘も十五回におよんだのである。そのあひだに、かずかずのめづらしい發掘があつたわけであるが、そのもつともかゞやかしいのは昭和九、十年における殷王墓の發掘であらう。その出土品のすばらしかつたことはさまざまに喧傳されてゐる。しかし、當の發掘者たる中央研究院歴史語言研究所からは何の發表もない。それで、揣摩憶説が附隨して一般には不正確な智識しかしられてゐない。これが侯家莊の殷王墓である。まづこれを、文筆で報道したものに、ホワイト師、ティン、パーレイ氏、ベリオ氏、また燕京學報の編輯者がある。さつそく利用して、自己の支那古代文化觀にとりいれたものにはクリール氏※があり、いちちやくこゝから散

佚しためづらしい遺品に注意して、その闡明に努力され  
た人にわが梅原末治博士がある。<sup>\*\*\*</sup>こゝから散佚した遺物  
は、さうたうのかずのほつてゐる、そもそも、この遺  
蹟は盗掘によつて發見されたし、また盗掘によつて發掘  
を促進されたのであつた。

いまかりに昭和十年、したしくその發掘をみたペリオ  
氏の言をきけば、その王墓は方二十ヤード、ふかさ五十  
フィートにおよぶものであつたといふ。氏のみたときに  
は、てうど三つの發掘が完了し、第四基の發掘中であつ  
たさうである。墳墓の底には木室があつたらしい。四方  
に四出する斜面の羨道があつて、てうどこの平面形は十  
字架の形をしてゐる。墓室には木棺があり、遺骸は俯身  
葬。木棺の下には往々堅孔があり、犬の遺骸があつた。  
主要な墓、つまり王墓のまわりには従者を埋めた數多く  
の墓があり、その多くは首がおとしてあつて、十人づゝ  
ひとまとめにして埋め、そのかたはらに十人の首が別に  
埋めてあつたといふ。王墓の羨道にはまた數百をかぞへ  
る青銅の戈、青銅の矛、饗養を饗した青銅の胄などが

あつた。それから四尺におよぶ方鼎二——そのひとつに  
は水牛の象形文字と水牛の像があり、他のひとつには鹿  
の象形文字と、鹿の像とがあつた。それから簋、罍、  
爵などおびたゞしい銅器類に、玉類、白色土器、そして  
象牙、それにいままでかつて例のない怪獸や鳥の形をし  
た大理石の彫刻類が出土した。そしてその上驚くべきこ  
とには、象、虎をはじめとして各種の動物遺骸が、埋葬  
されたまゝのすがたにおいて發見されたといふ。

しかし、墓はこれだけにかぎらない。このあたり司空  
村から武官村、侯家莊にわたつて散在する墓は千の數を  
こえるといはれてゐる。

こんなわけで侯家莊とはどんなところであり、殷王墓  
がどうなつてゐるかは、わたくしどもにとつて、かなり  
興味をひく問題なのである。それで途中、安陽にぐる車  
中でも、ときどき小野君と、侯家莊見學の希望をもらし  
あつたことであつた。

\* W. C. White; *The Richest Archaeological Site in China*  
(Illustrated London News, March 23rd) 1935.

H. J. Timperley; *The Awakening of China in Archaeology* (Illustrated London News, April 4th) 1936  
 P. Pelliot; *The Royal Tombs of An-yang* (Studies in Chinese Art and Some Indian Influences) London 1938.

『燕京學報』第十七期。

\*\* H. G. Creel; *The Birth of China*. London 1936.

\*\* 梅原末治博士「河南安陽發見の遺物——主として新發見の古墓出土品に就いて」(東方學報、京都第七册)

## 3

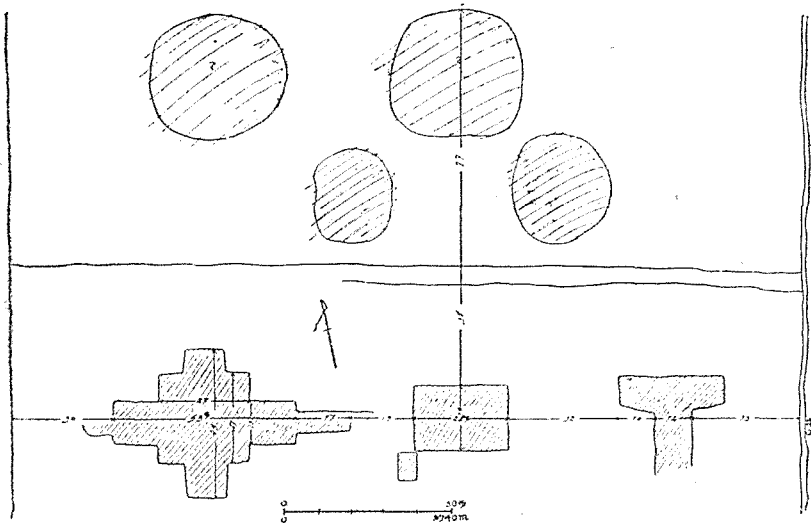
その侯家莊はいまやわれわれの目の前にある。

一行はたゞちに侯家莊に入った、入るとまづ要害堅固さうな自警團の詰所へ案内されたが、すぐ兩三年前に大發掘のあつたところときゝたゞした。それはさうさもなゝいことであつた。すぐひとりのわかい男が、子供をだきながら、さきにたつて案内してくれた。

一行は晝食をしごこなつたので、ひもぢさと、さむさにいくらか閉口しながら、黙々としてそのあとへついてゆく。村を出て、すこし畦の間をぬけると、平坦な耕地

にでる。しかし、いくらか村の方より高くなつてゐるやうである。村より北三支里といふ。安陽から二十支里ぐらゐあらうか。こゝにひろびろとした綿畑が展開して、路傍に一本の木がつくねんと立つてゐる。案内者はこゝだといふ。いはれるまゝに道路から西へ入つてゆくと、なるほどひらたい何も載えてない畑に、すこしくぼんだところがみえる。ひとつ、ふたつ、三つ、東西にならんでゐる。あとで地主といふ人がやつて來た。そしてまだ、北の綿畑に三つ四つくぼみのあることを知らしめられた。しかし、かれらは、發掘の當時のことは何ひとつ知らぬといふ、研究院の人たちは一切村人をよせつけなかつたのださうである。

これでは何ごともきゝだせない。しかたがないから、このくぼみを検査することにする。東から第一は方三十歩のくぼみ、第二は二十八歩に十九歩ばかりの方形、第三はもつとも複雑で、もつとも整然としてゐる。方二十七歩の方形に、四邊おのおの幅十三歩ほどの袖がついてゐる。綿畑の中はよく形をみきわめることができなかつ



第四圖 安陽侯家莊殷王墓址見取圖

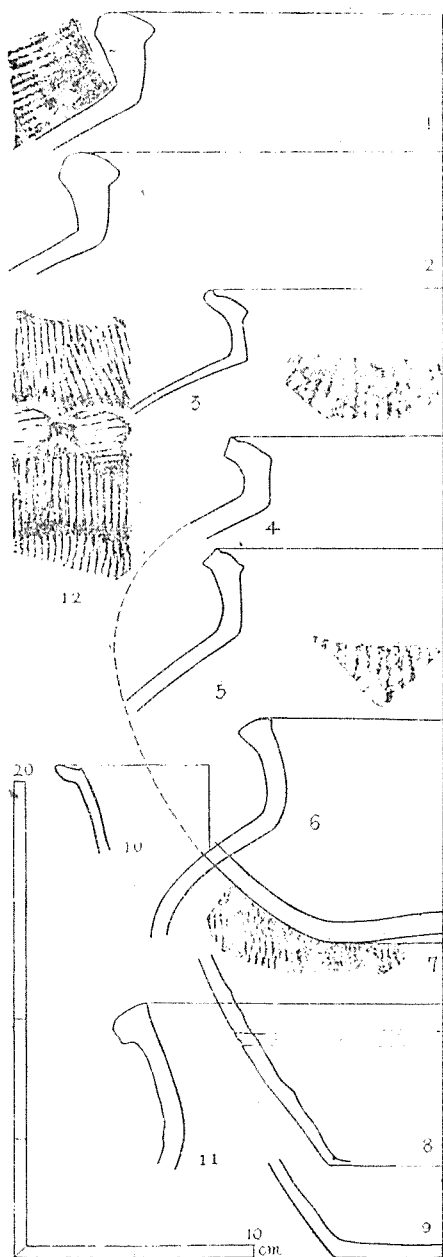
たが、四つばかりのくぼみがあつた。第五圖

しかも、この地區をみると鼠色の土器が散布してゐる。獸骨、鹿角も散布し、なかには人骨の一片さへあつた。その獸骨、鹿角は綠青で染つてゐるから、銅器といふしよにあつたことがたしかである。またこの附近を検するに、發掘で攪亂された地域にのみ、表面に遺物が散布してゐるのである。まわりの土地にはほとんどこの種の遺物をみいだせない。したがつて、これらが一括して、この古墓の出土品であることが明瞭である。もしさうだとすると、この片々たる土器、獸骨も、はなはだ貴重な資料だといはなければならぬ。

4

さて土器であるが、これはすべて鼠色の繩席文土器である。第五圖にしめしたやうに、まづ壺の類がある。それは頸のところガコの字形になつてゐて、秦漢式の遺跡から出土する壺とよく似てゐる。たゞ細部のつくりに相違があるのみである。大きなもの(1、2)については完

第五圖 侯家莊殷王墓土器

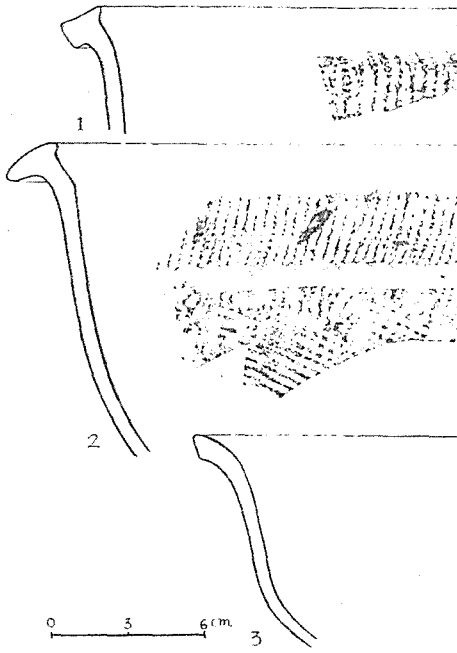


形品をみないが、中位なものについては往々完成品をみる。その底は丸底で、すこし上り、全面は繩席文があつて、肩部に繩をつけたやうな波状の起伏がある。そういうふ底は7にある。またさういふ肩部(12)もすくなからずある。もちろん、文様のない平底(8、9)もある。

この肩部にみる絡繩の裝飾は、繩席文股壇土器にみる獨特の意匠である。まづ肩部に、断面山形の隆起線を水

平にとりつけ、その上等間隔に繩席をもつておしつけたものである。この壓痕をみると、これにおしつけた繩席といふのは丸い棒切れにひもをまいたもので、その徑が二センチそこそこのものであつたことがわかる。したがつて、これらの土器にほどこされてゐる繩席の壓痕も、かういふひもまきの棒を廻轉して、土器表面を調整したなごりと考へられる。そして口縁部を下にしてつくつた





第六圖 侯家莊殷王墓土器

ため、その繩席の壓痕は丸底の底面にまでおよんでゐるのがふつうであつて、高足の裏面にもまたみうける。(第七圖2、3)そして口縁部の方は、壺もまた甬も、おそらく陶車を利用したものであらう。

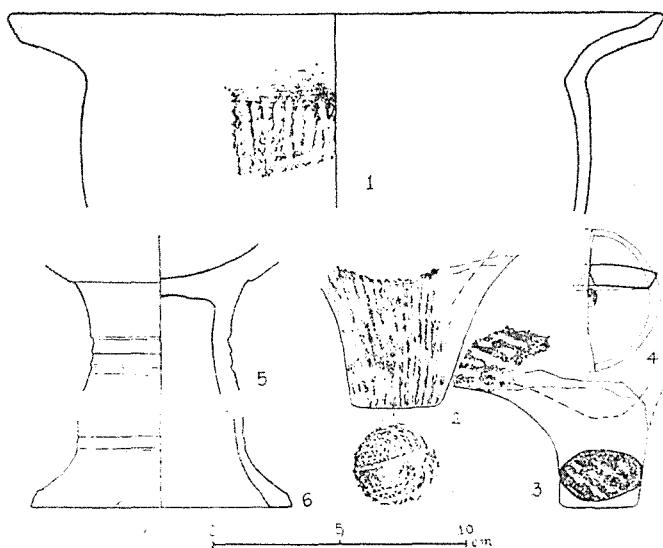
壺のほかには、口のひらいた鉢形土器(第六圖)があつて、その形をもつて銅器に對比をもとめると、水を盛る洗鑑か、黍稷稻粱を盛る甕甕であらう。洗であれば平底、

篋であれば圈臺がつく。あるひは繩席文のやゝ粗糲な大器は洗鑑で、平滑な表面の緻密な小器は甕甕にあたるのであらうか。さうすれば、1、2は前者にあたり、3は後者にあたる。

高杯、つまり豆(第七圖4)もあるが、のちのものにして足が太くひくい。つくりは精良で、薄手である。やゝ黒みかゝり、特に堅緻である。6も豆の足であらう。しかし、あるひは尊か、甗の足であるかも知れぬ。表面文様なく、なめらかである。

つきには甕(第七圖)である。口にはひろい縁がつき(1)、すべて赤色、あるひは部分に黒褐色を呈してゐる。割合に薄手で、土は粗糲。口縁部以外には繩席文がある。足は太く、みちかい。いま採集しえたもの(2、3)は、すべて足のはつた、ひくい甕に屬する。3は足のさきだけを、あとからとりつけてつくつたものである。

以上要するに土器は二種類ある。一は繩席文のある土器で壺・鉢形土器・甕などがあり甕は、お



第七圖 侯家莊殷王墓土器

ほむね赤色を呈する。他は繩蓆文なく、表面平滑の精良土器であつて、簋、豆などをつくつたらしい。別に褐色の胎に、表面のみ黒くした土器がある。採集した一片は豆

の皿の部分らしい。やゝ厚いつくりであるが、土質は精良で、形制は整然としてゐる。

なほ土製紡垂車の未製品が一個ある。その鈍角をなした孔をみると、これを穿たうとした錐のさきの鈍かつたことが推想される。何か土器の底部を利用して、つくらうとしたものらしい。

まためづらしいのは小野君のひらつてくれた土製の轆首一個(第二圖)で、鼠色を呈し、下部はこわれてゐる。簡略なうちに、生々とした相貌をしめしてをり、月輪形にひらいた大きな角はみごとで、銅器にみると同様な傳統をしめしてゐる。

別に加工した白大理石石片一個と蚌器一個と、なほ摩滅してしまつてゐるが、鑄型断片らしいもの一個をえた。また獸骨については、直良信夫氏にみてもらつたとこゝろ、牛と馬と豚であつたが、なほ鹿の角もあつた。

5

とにかく、これだけのものが殷王墓にあつたことだけ

だけは確實である。たとへば然たる銅器石彫の類がいま  
みられないにしても、その時代遺物の基調をなす、ふつ  
うの土器が一とほりわかつたことだけでも、われわれの  
一日の見學は無駄でなかつたとおもふ。

もつとも、これを殷王墓の出土品とみたことについて、  
なほひとつの反對があるかも知れない。といふのは、た  
とへば發掘地以外に散布せぬとしても、墓底に至るまでに  
なほ別の時代の包含層があつたのではないかといふ疑  
問である。これに對しては、われわれの採集遺物が比較  
的に單純であるといふこと、またがんらいが墓であるか  
ら、その上に別の時代の包含層ができるためには、この  
墓の墳丘が一旦平らにならなければならぬが、そ

う大變化がこれらの遺物のしめす時代より以前におこつ  
たとは考へにくいといふことを申しそへておきたい。

これによつて甕子窩や牧羊城の發掘によつてあきらか  
になつた大壺、小壺、豆、洗、(鬲)といふ秦漢式の土器と  
比較してみるのに、豆、洗、(鬲)はかなりの變化を經て  
ゐるが、壺類はほとんど變化がない、わづかなつまみぐ  
あひのくせが相違してゐるのみである。このことは、こ  
の遺物を採集した瞬間からして、果してこれが殷代にま  
で遡るものかどうかといふことについてわたくしに多大  
の疑問をいだかした。しかし、たびたび自問自答をか  
さねたすへいまでは上のやうな見解に落ちつかざるをえ  
ないとおもつてゐる。